

「上総国府」を歩く

～市原説を中心に～

【はじめに】昨年、市原市は市制60周年を迎えました。人でいえば還暦を迎えたことになります。コロナ禍も落ち着き、普段の日常が戻ってきました。昨秋には、4年ぶりに「第10回上総いちはら国府祭り」が開かれ、2日間で31万人が訪れる盛況ぶりだったという（市原市広報誌・11月号）。そこで今回は、いまだに所在地がわからない「謎の上総国府」にスポットを当てました。30年前に、市原市は「上総国府の所在地の確認調査」を始めたが、これといった成果は挙がっていません。その間に候補地は「村上」、「郡本・門前」、「市原」、「能満」の4説に絞られました。最近では、市主催の「上総国府関連講座」などでは「郡本・市原説」、「村上説」、「移動説」を唱えています。広報誌で「国府の伝統と誇りを胸に刻んだ“上総いちはら国府祭り”」と見出しが躍りますが、市原市民は「国府」をどれほど理解しているのでしょうか。

この講座では、近隣の国府所在地の取り組みや地理的状况を紹介します。上総国府については、候補地を紹介。なかでも発掘確認調査の事実などから有力になっている「市原説」を中心に論を進めます。

【国府について】国府は律令時代（奈良・平安時代）に、全国（北海道、東北地方の一部、沖縄を除く）60余州に置かれた国の行政機関。地方の政治、経済、文化の中心だった。国府の近く（郊外）に国分寺・尼寺が建てられました。多くの市民は国分寺・尼寺跡、市役所が建っている場所近くにあったと思っていますが、それは間違いです。「国分寺・尼寺」は「人臭のしない好い所に建てよ」という天皇の詔が出ているからです。「国府」は、概念としておおむね「国庁」、「国衙」、「国府」に分類されます。

国庁は、国の役所の政庁で各種儀式、政務、饗宴などが行われました。溝や堀などではっきりと区画されていました。現代でいうと、千葉県庁といったところでしょうか。

国衙は、曹司、各種工房など行政機関など国庁を中心とした空間。現代では県警本部、裁判所などが集まったエリアで官庁街です。国府は、国庁、国衙を含み、市場（市）が立ち庶民（市民）が暮らした都市エリア（市街地）です。政庁は南に門を開き、正殿を正面北寄りに置き、前殿、東西に脇殿があり、このコ字型の建物配置になっているのが全国共通。国庁域はおおむね1町（100^町）四方です。

「国」は、規模により大国、上国、中国、下国の4ランクに分けられた。国司として「守（かみ）」、「介（すけ）」、「掾（じょう）」、「目（さかん）」の役人が中央政府から派遣され、政務を執りました。

【上総国の場合】上総国は大国でした。椽と目は二人体制がとられました。国府域内に、国司が住む国司館、鍛冶や大工などの工房、徴税した米などを貯蔵する正倉、厨房、市場、市原軍団(当初)などが配置されました。上総国は舌状状態の狭小である市原台地を国府域として、うまく利用したのではないのでしょうか。平安時代初期の826年10月に新王任国になりました。「大守」が中央(京)にいて、天皇の皇子がなりました。実質的には「介」が国のトップでした。新王任国は上総のほかに常陸、上野の3国(いずれも大国)です。歴代の国司には、中央政府で活躍した人や有名人が派遣されています。陸奥国で黄金を発見して東大寺の大仏建立に貢献した百済王敬福(くだらこしきに・きょうふく)や万葉集を編さんしたとされている大伴家持。平安時代の女流文学「更級日記」で知られる作者の父親・菅原孝標(介)。孝標は「勉学の神様・天神さん」の菅原道真の子孫です。歴史が下って戦国時代には織田信長が「上総介」を名乗っています。

【上総国府の推定地】

(村上説)上総国分寺・尼寺跡がある国分寺台が区画整理事業であらかた発掘確認調査が済み「惣社地区」に国府(国衙・国庁)がないことが分かりました。このことから惣社地区から養老川を見下ろす村上地区を想定。国分寺台地の下方8町を想定したのが石井則孝氏(1976年)。養老川の水運などを考慮。石井説より南西に方8町を推定したのが須田勉氏(1979年)。村上白旗地区の発掘確認調査で、周囲に溝を構えた掘建柱建物を検出。養老川の旧河道に面することから国府津など公的な施設ではないかと考えられています。

(郡本・市原説) ①市原地区は古代郡名を冠していて、郡本地区は郡家(ぐうけ)の存在を示唆している②郡本八幡神社の社殿に使用されている礎石は社殿の大きさに比して不相応に大きい③神社境内地の鳥居前に残された2個の作り出しのある礎石は古代に礎石柱の荘厳な建物があつたことを示唆④阿須波神社「万葉集」20巻、755年(天平勝宝7)の防人の歌「庭中の阿須波の神に小柴さし 吾は斎はむ帰来まで」(4350)一とあるのは「庭中」が国府(国衙)の屋敷神ではないか(今井福次郎氏・万葉地理の研究)⑤市原地区での伝統神事「市原の柳楯神事」。八幡地区の飯香岡八幡宮の例大祭に欠かせない神事で、「上総国府」の関連性、存在(所在地)をにおわせる。市原八幡神社は飯香岡八幡宮の元宮とされ、国府八幡宮で総社を兼ねたといわれる⑥周辺に門前古甲、藤井字古光が存在。古甲は古国府の転化か⑦広範囲に奈良・平安時代の遺構が広がっているが根拠になっています。郡本・市原説に否定的な見方として一辺二町に近い国衙域を想定した場合。地形的制約があるとみられています。

(移動説)①古代の国府・国庁は必ずしも一か所にとどまっていなかった②出羽国、肥後国などのように低地や低い丘陵から、その後に高台に移動している＝市原市教委主催・ふるさと歴史講座など＝参照にしました。

【市原説・寺社配置から読み解く(山越推理)】

今まで「上総国府」について、数十年にわたり文献や各種の国府関連の歴史講座に参加したりして上総国府の所在地探しをしてきました。その結果、ある程度の上総国府の姿が浮かび上がりました。その際に「国府 その変遷を主にして」(木下良・教育社)が参考になりました。木下氏は「諸国の国府(国衙)域には、四隅に神社が祀られている場合が多い」ということを指摘しています。併せて、元市原市埋蔵文化財調査センター所長の宮本敬一氏、田所真氏が寄稿した「能満地区周辺の遺跡と文化財」、「郡本地区周辺の遺跡と文化財」(いずれも市原市地方史研究連絡協議会発行)を参考書に探求しました。

田所真氏は「市原の神社と柳楯神事」の中で、「市原地区の台地全体を眺めてみると、神社が村の四隅を取り囲むような位置に鎮座。決して不規則に置かれているのではない。この辺りを守っているようだ」と記しています。

手始めに掲載の明治初期の地割り図から市原地区の市原八幡神社、阿須波神社、日笠宮神社を確認。南東方向の神社は確認できなかったが、能満川寄りに天王崎という字名があることから「天王さま(八坂神社)」を想定。地割りにも注目しました。以前(約30年前)に郡本・古甲地区で検出された大溝は東西方向の地割りが発掘・確認調査の目安となり、重要な建物は南面するため、自然と東西方向が重視されました。

この結果、不規則であるが四角形になった。それぞれを対角線で結ぶと、交点に東西の地割りが乗りました。次に市販の市原市全図に載る神社に点を書き、それらを線で結んだ。東西南北などに見事にならんだのだ。郡本・門前地区、能満地区におよそ5町域の空白地帯が生まれた。国府の付属寺院ではないかとみられている光善寺廃寺遺跡(現光善寺)を起点に、千草山廃寺遺跡(市原中・市原市武道館)―国分寺(上総国分寺跡)を結ぶと、見事な二等辺三角形が描かれました。国分寺―千草山廃寺との線上に上総国分尼寺跡、王賜名鉄剣が出土した稲荷台1号墳(遺跡)が乗り、上総国府は計画的にち密な設計に基づいてつくられた(置かれた)ことが推測できます。

【コラム・推理】

【能満川とてび(用水路)】「房総古代道研究1号」に寄稿・文末で指摘(講座資料に添付)

した市原台地の南北に走る能満川と“てび”と呼ばれる用水路について。能満川は市原博物館、市原市武道館近くを水源に山木入り口まで。その後は「新田川」として八幡地区まで通じて東京湾に注いでいます。以前は市原台地下で五所地区に続く「北川」と二手に分かれていました。明治初期の市原地区地割り図から小路の配置状況を考えると、両脇が耳のように弧を描き、計画的に造られたように見えます。能満川に接する川岸に幅の広い道が一か所確認できます。ここから国府に、荷揚げなどを行っていたのでは。昭和30年ころまで、今の宝積寺(門前・玉泉幼稚園)前に「門前貝塚」が存在しました。まぼろしの門前貝塚と呼ばれ、千葉市の加曽利貝塚に匹敵する規模だったらしい。当時は、能満川の水量が豊富だったことがうかがえます。記憶では、お寺本堂前に大きな池があった。境内周辺に5つの池があったという(寺関係者)。ひょっとしたら“船だまり(国府津(内港))で、国府の水辺の祭祀などの行事(放生会)も行われたのではと想像できます。

西側台地下では、今でも「条里制」の名残の字名が残る水田が広がり、ほぼ真ん中を南北に用水路が走っています。市原・郡本条里復元図を見ると用水路の南北に「横町（庁?）」、「北横町（庁?）」があります。北横町の西側に「中久保」が見えます。久保は「くぼ地」のこと。地下4～5mで版築状の粘土質と丸太など木製品を確認したことがあります。木製品は市原市埋蔵文化財調査センターで保管中。大石など重量物の運搬は、養老川など大きな川より、幅が狭い運河のような小河川の方が安定性で優位にあるという。水量が少ない場合は「曳船方式」で運んだらしい。よって「運河だった説」を提案したい。もしかしたら、上総国と下総国の境である「村田川」、「養老川」と連動していたかもしれません。

【一日(人) 市場と市原・国府の関係】「市原」の語源論争があります。市原の名称は、すでに奈良時代にありました。田中喜作氏の労作に「市原の地名」(市原地方史研究 18号・市原市教育委員会)があり、田中氏は郷土史家の藤原文夫氏の「イチイの木が茂っていた」という櫟原説に賛同し紹介しています。よって「櫟原説」が一般的になっています。元市原市の学芸員で古代瓦など古代市原に精通している宮本敬一氏は「国府市庭(こくふいちば)説」を唱えています。市原市門前に残る字人市場という地名に注目。実は人市場は「一日市場」で、上総国で一番早く開かれた市場で「親市」だという。わたしも「一日市場説」に賛同したいと思います。大きな原(開拓された場所)に市場がたった。「原」は九州地方では「ばる」とも呼ばれます。「はる」は「治る」「墾」に通じるという。「一日市場」の名称は長野県安曇野市のJR大糸線・一日市場駅があり、最近(5年ぐらい前)に岐阜県にあることが分かりました。「明智光秀関連」で地図帳を目にしていたところ、岐阜県瑞浪市に「一日市場」の地名があることを発見。よく見ると近くに「市原」の地名もあることも分かりました。瑞浪市は戦国時代の明智光秀の本家筋?にあたる土岐氏の本拠地で館があった場所。かつては美濃国の国府があったという。ちなみに土岐氏の代々の墓碑が建つ菩提寺は「光善寺」(廃寺)だった(インターネット調べ)。これは偶然だろうか。歴史地理学的に、今後の「上総国府探し」の参考になりそうだ(おわり)



上総国府はどこにあったか？

(平成24年度歴史講座より)

令制国(りょうせいこく)とは、律令制に基づいて設置された日本の地方行政区分である。奈良時代から明治初期まで、日本の地理的区分の基本単位であった。

国衙(こくが)・国庁(こくちょう)…………… 行政機関のこと

国府(こくふ)・府中(ふちゅう)…………… 国衙を中心とする都市域のこと

郡本・市原説

- 「府中」の名称が能満にある府中日吉神社が残っている。
中世国府があり、古代の国府もあったという説。
- 藤井地区に伝わる銘文、懸仏には、「守公神御正所者上
総国府中国庁国御目代日高彈正朝光沙弥道光」(表銘文)
「金資弘覚大進沙門応永9年」(1402)6月1日(裏銘
文)とある。
- 郡本・市原周辺には、字名に、門前字古甲・藤井字古光
が存在する。古甲は古国府。
- 広範囲に奈良・平安時代の遺構が広がっている。

移動説

移動説

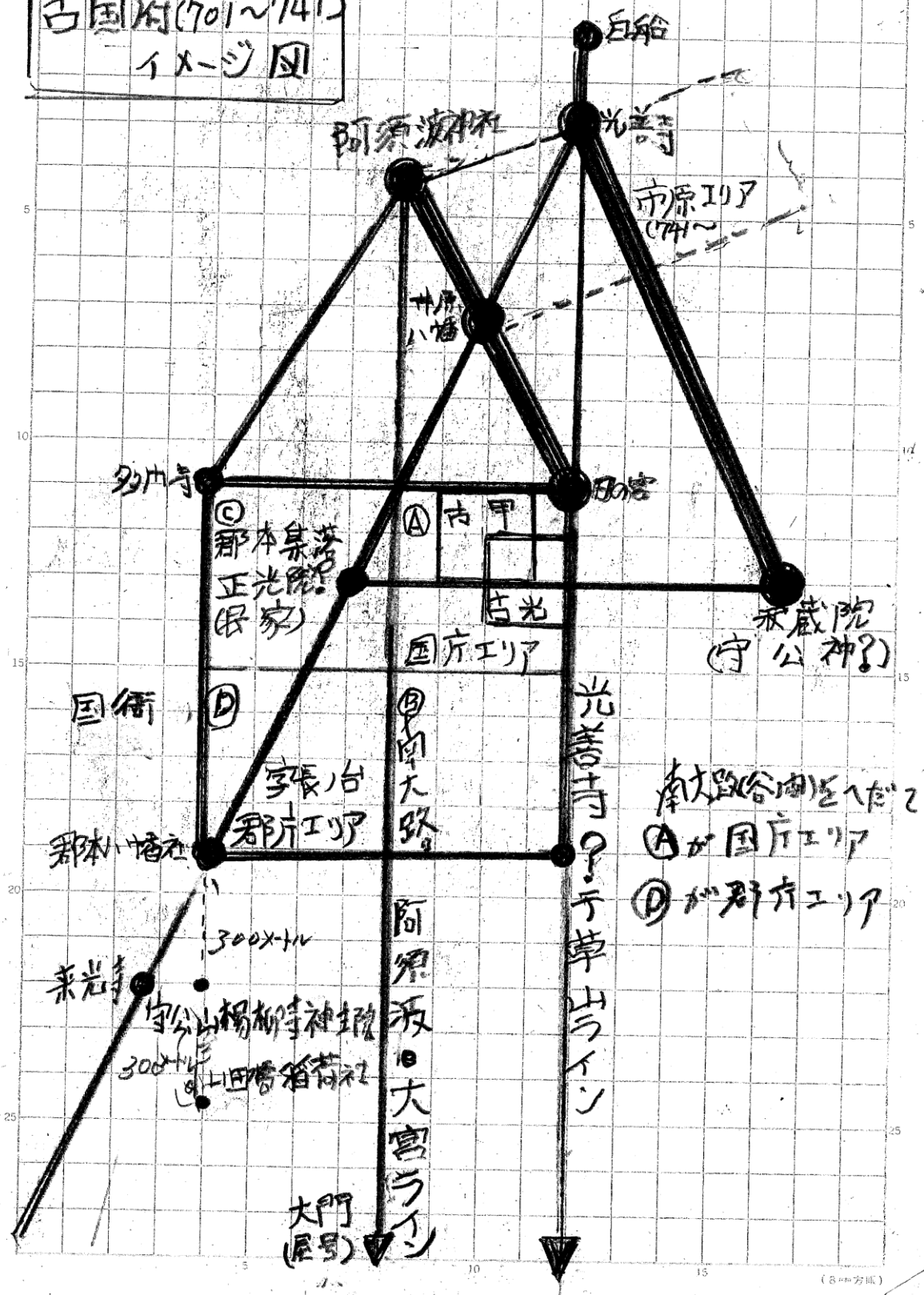
- 古代の国府・国庁は必ずしも一か所にとどまっていなかった。
- 出羽、肥後などのように低地や低い丘陵から、その後高台へ移動している。

村上説

- 隣接地に国府と関連する「惣社」(総社)が地名として残る。総社は国府の近くに置かれた。
- 館山道建設にともなう調査で、周囲に溝を有した掘立柱建物群を検出した。旧河道(養老川)に面することから、国府津などの公的な施設の可能性がある。

山越国臣

古国府(701~741)
イX-ツ風



山越國臣

